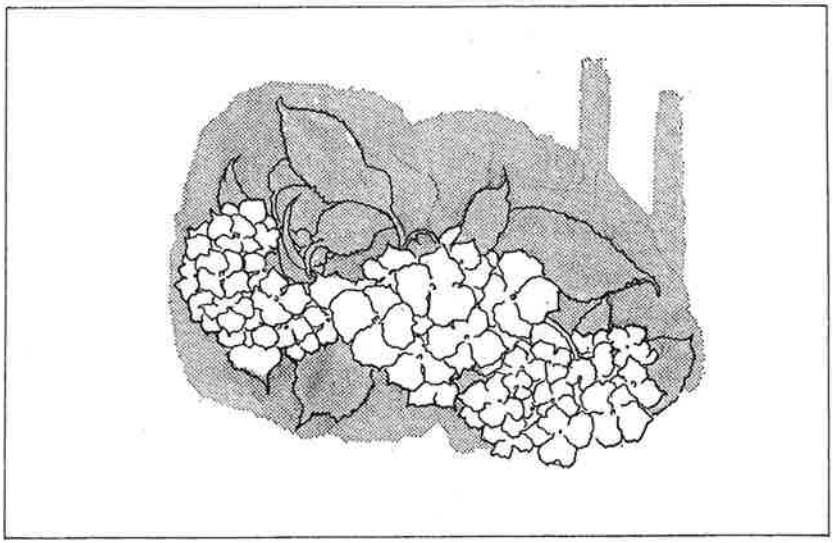

明治の佐伯三青年（十四）

――龍溪・鳴鶴・鶴谷――

御手洗　一而
（会員・埼玉県川越市）

大新聞と小新聞

この春には、山口・高知出身の警視や警部による不穏の動きが、警視庁内にも起こっている。矢野や藤田らのペンの力とは別に、武力をもって対抗する士族の動きは、全国的にくすぶり続けていた。政府はこれらの動きに頭を痛めたが、言論の弾圧には、たった一片の布告で間に合わせようとした。新聞紙条例や讒謗律の制定は、各社の編集長を容赦なく獄につなぎ、その筆勢を弱めるには確かに効果があった。政府にすれば思うつぼであったが、この弾圧に対する民衆の反感は、日に日に募るばかりであった。

筆禍事件といっても、箕浦などはむしろあわれな犠牲者であった。それは報知に載せた植木枝盛の「猿人政府論」に対する責任を問われたのである。当時掲載の責任者であった岡孝敬が一年半、箕浦は相談役であったということで二カ月の禁獄を申し渡された。

政府の姿勢がいかに強硬であったかがわかる。

のちに、前島密の「夢平閑話」は、当時の大久保利道が、「言論自由の権利を縮少したりとの誹謗は、甘んじて受けんのみ」と語ったということを紹介しているが、まさに新聞恐怖時代の幕明けであった。

矢野は、上京以来各社の新聞を片っぱなしから読み漁り、出社のための雑用をすませた。大阪分校時代の教え子であった森田文蔵（思軒）を本塾へ入塾させたのもこの頃である。

藤田の遊軍として報知に入社した矢野は、五月十三日の社説に「賞罰當否県官ノ政務」、続いて二十日、二十二日に、「税法ヲ論ズ」を掲載し、次々に諸制度について学究的な論説を発表した。矢野の研究の成果は、当時では一風変った社説となり、明治政府にとって痛い弱点をつかれる形ではあったが、その論法は、条例を云々する問題ではなかった。「輿論公議」の社会論や「陪審論」の現実把握は、政府の研究課題を先取りするものであった。

藤田は、矢野の入社によってひと安心したわけではないが、思い切って豊吉を落籍し、新居に迎え入れることにした。養家の藤田家に気がねはあったが、志士肌の藤田は、天下国家は論じても、養家や一女性に頓着するような男ではなかった。意のまゝに自分の思い通りの道を進む気性は、明治草創期に生きる若者の一つのタイプであったかもしれない。

藤田の言動は、よそ眼には高慢に映ったにちがいない。重鎮の栗本をさておき、今度は先輩矢野を副主筆として迎え入れた。この頃の栗本は、新聞紙条例や讒謗律をあざ笑うように、又薩長政府の今日をとっくに見通していたかの如く、すべてを若者に任せ、飄飄（ひょうひょう）として読物を執筆していたが、藤田の文才を一番よく知っているのは、栗本であり矢野であった。

矢野は、のちに藤田の文筆を天才と評している。藤田を知る人でなければ藤田のよさはわからないが、高慢が取り柄の藤田であった。だが、豊吉を落籍した時、豊吉の腹にはすでに藤田の子を孕（はら）んでいた。藤田にしてみれば、高慢の不評よりもその方がばつが悪かった。

豊吉を迎えた浜町の新居は、一ぺんに明るくなった。そして、一番喜んだのは、書生の中でも別格の犬養であった。犬養は、平民でも百円の月給とりになれば、好きなことが出来ると思い、眼の前に身近な目標があるのは大へんな励みになった。その上、藤田の苦学生時代を知っている豊吉が、なにかと面倒をみてくれるのが嬉しかった。

しかし、犬養にも悩みがあった。

犬養は英学の修業に専念して、早く藤田や矢野の城に達したかったが、それには何よりも時間が欲しかった。浜町から三田までの通学も時間がかゝるし、夜間に藤田家の書生に漢学を教えるのもわずらわしかった。通学の片道は、藤田の手当で人力車に乗り、苦学生にしては恵まれた環境であったが、「三年間で百円の月給取り」になるには、余計なことは考えたくなかった。そこで犬養は、あえて苦労の多い寄宿舎生活を選ぶことにした。

矢野は、報知社に出社するようになってから、三、四日おきに社説を担当した。報知の論客は、ほとんど福沢門下生が多かった。過激な「采風新聞」や「評論新聞」の筆禍事件は、その後も続いたが、矢野が入社後の報知は、幸いに小康状態を保っていた。

新聞社は人の出入りが多い。中には情報を種に、ゆすりたかりの部類も多かった。

今日も階下で大きな声がした。

「御大はいるか」

御大とは栗本翁のことである。その客は、づかづかと足音を立てて二階へ上がってきたが、一見、こうした得体のしれない旧幕臣の客も多かった。

執筆中の矢野は振り向きもしなかったが、応待した波多野が栗本の留守を告げると、客は残念そうに辺りを見廻して、再び階段の方へ足を運んだ。

その時、外から帰ってきた藤田と、階段を挟んで上と下でばったり視線があった。

「やあ藤田か。御大がおらぬので帰ろうかと思った」

「それはあるまい。御大だけの報知でもあるまいし、こゝに藤田がいるではないか」

藤田はこう言いながら客を引きとめた。

「矢野さん」

藤田は矢野に後から声をかけながら、この客を紹介し

た。

「こちら沼間さんです」

矢野は軽く頭を下げた。どちらも名前だけは知っていたが、初対面であった。

「社説を書いている矢野とは君のことか。以前から茂吉に聞いて興味深く読んでいるが、なかなかの勉強家じゃのう」

歯に衣をきせぬ沼間は、矢野よりは七、八歳上に見えた。矢野は、じっと沼間の眼を見ながら、口の悪さとは裏腹に、澄んだ眼にどこかひかれるものがあった。

この沼間守一は、三河武士の血をひく旗本の家に生まれ、維新にはフランス士官に学んだ歩兵戦術を駆使して、会津庄内藩の兵を率いて官軍と対戦している。明治になってから板垣の推薦を得て新政府に仕え、官費生として英国に留学して法律を学び、帰国後は元老院きっての人材としてその名が高かった。沼間は栗本を敬慕し、こうして時々栗本を訪ねていた。

英学を専攻した矢野や藤田にとっても先輩であったが、矢野は「官人にしては口が荒い」と思った。それもそのはず、沼間は「彼奴は馬鹿だ」というのが口癖である。気に入らぬ者は高官でも馬鹿呼ばわりで、眼中に敵なく、気骨の激しさでは藤田に似ていた。だが、雑談の間に洗練された学識がちらりと覗く。矢野にとっては何とも面白い人物に見えた。

「ところで沼間さん。矢野さんは鉄砲の名手ですぞ。十五歳にして免許皆伝」

藤田は、沼間からよく鉄砲打ちに誘われるのを思い出したのである。

「そうか鉄砲をやるか。そいつはいい相棒が出来た。近頃では維新ほどの相手もいないが、ひとつ鴨でもやるか」

沼間は嬉しそうに矢野を誘った。

矢野は頷いた。久し振りに狩猟もよいが、英国での法律学専攻に興味を覚え、「俺も洋行せねばー」という希望に胸をふくらませていた。

沼間が、元老院を離れ、「東京横浜毎日新聞」と「嚶鳴社」を主宰して、民権運動に活躍するのはのちのことである。

たまに早く帰宅する藤田は、書生達が面白半分に眼を

通す「仮名読新聞」を拾い読みすることがあった。
この頃の新聞は、紙面の大きさによって「大新聞」と「小新聞」に区別され、「小新聞」が、市井の雑事や通俗的な興味本位の面白い読物を掲載して、一般に根を下ろし始めていた。
「仮名読新聞」とは、新聞名が示す通り、当時人気のあった「平仮名絵入新聞」と「読売新聞」を併用したものである。
藤田の眼にとまったのは、その中の連載ものであった「猫々奇聞」で、読みながら思わず声を出して笑った。
「豊吉。面白いことが書いてあるぞ」
藤田はこう言ってその小新聞を放り出した。
豊吉の手にした新聞は、女子供でも読めるようにルビが付してあり読みやすかった。
「馬鹿馬鹿しい。こんな新聞もあるのね」
豊吉は相手にしなかったが、一般読者には興味があった。
この「仮名読新聞」は、創刊者の戯作者である仮名垣魯文が横浜で発行し、始めは隔日刊であったが、九年八月から日刊となり、「猫々奇聞」は、芸妓の裏面を書いた続きものであった。
豊吉は一笑に付したが、藤田は肩のこらない新聞として感心し、むづかしい社説よりも、案外こんな読物から大衆を啓蒙する方法もあると思い当った。
そして、著者の仮名垣魯文とは、一体どんな男だろうかと想像してみたりしたが、前に書いた「平仮名絵入新聞」を改題した「東京絵入新聞」は、柳亭種彦こと高畠藍泉が編集長をつとめ、これらの「小新聞」は、報知とちがった読者層を集めて人気があった。
この頃から、藤田は時として考えこむことが多くなった。毎日の社説に四苦八苦しながら、自分の思う通りのことも主張できず、言葉を選びあいまいな表現を探すのも不本意であった。藤田にしてみれば、戯作者が読物を書き、あるいはそれを芝居に上演して民衆の共感を呼び、その新聞がはやり物のように活路を見出すのが羨ましかったのである。
しかし、「大新聞」の記者達は、あたかも藤田が、士族と平民の差別をうけたように、これら「小新聞」の探訪（記者と呼ばず）や雑報係と区別し、自らその権威を保とうとした。
新聞のこの大小の区別がなくなるのは、明治も三十年代に入ってからのことである。
（つづく）